

魔面地名由来

魔面の神社は、房住山で首切らいた、落ち人ね、それ飛んで来て落じだところ(所)が魔面だわけです。それが神社の母体さなつてらがなあ。俺の親父、石川理紀之助の愛弟子だったすもの。それで石川理紀之助の直筆の本、あつたすものなあ。房住山で兄弟三人首切らいた話ついでらじ。みんな鬼の顔も描いでねえ。その本、魔面の舛屋利三郎さんつて、借りつてつたものな、私の家から。私の家さ済まさねうちに昭和十九年の大火で焼けてしまったすものなあ。常盤農協のどつからこつちの方、刈橋・魔面は全滅だったあ。その時に焼けてしまったすもん。私の家の宝物だった、石川さんの書いたもんだつたために、魔面の地名の由来つてば、その話だった。んだども、魔面の人がただば、ある程度わがつてらべども。魔面の人がただば、最近はどうだかわからないけれども、十年ぐれえ前は毎年何人か、房住山へ参拝しているすよ。今はどんだが。私より年輩の人がただば、毎年房住山へ参拝に行つてらつたすよ。そやしわ

がるつてば、舛屋誠一ぐれえのもんでねがなあ。

与斉元雄(81歳)・勝江(71歳)(外割田)

(解説)

〔地名由来〕の項で魔面の由来について解説しているが、ここでは世間話としてその地名由来が変形して伝わっていることを見ておきたい。ここに出てくる石川理紀之助の話は明治二十九年から始まった「遺産調」のことに由来する。「遺産調」は各村の有能な青年層を調査員にして、その土地の地誌を調べて、将来の産業を展望しようとする作業であったが、その過程で石川理紀之助に私淑する青年も多かった。与斉さんの父親もその一人であった。石川はこの調査の過程で得た各地の歴史的事項をまとめて「旧蹟考」を著したが、「常盤村旧蹟考」もそのひとつである。ここに述べている火事で焼けてしまった宝物は、その書のことを言っている。石川理紀之助のことも、房住山参詣のことも、だんだん忘れられていっていることを示している。